

登場人物

蛭きさら 3年生。パレード部副部長

釜 3年生。パレード部員

野見 3年生。きれいな演劇部員

青木先生 蛭のクラスの担任

工藤先生

戸田先生 パレード部顧問

野見父

轡田高校、秋の文化祭。その前日。

放課後になってもまだ多くの生徒が明日の準備に向けて、学内に残っている。

舞台は、職員室の、出入り口に近い場所。

舞台上の約半分は生徒立ち入り禁止エリアであり、床のラインによって明確に仕切られている。

さらに、奥には給湯室がある。また、別の場所はロッカールームへと続いている。

机はあるが、椅子は全て撤去されている。

教育委員会の方針により、学内のほとんどの椅子が撤去された。

舞台の真ん中あたりに、なにやら「物体」がある。先にネタバラシをしておく、これは、演劇部が明日の公演で使うための小道具である。

職員室の奥の方では、工藤先生がヘッドホンで音楽を聴きながらパソコンを扱っている。

職員室の奥にあるロッカールームから、ロッカーを中からガンガンとノックする音が聞こえ始める。音は、しばらくするとやむ。

3年生の蛭が入ってくる。

蛭 失礼します。3年、蛭です。秀葉先生に用がぁつてきましたー。

反応がないので、床の線ギリギリまで入って職員室の奥をのぞき込む。

工藤が気づく。

工藤 どうした？

蛭 あー、先生。秀葉先生に用がぁつてきました。

工藤 秀葉先生、あれ？ さっきまで、それ。

蛭 ああ、はい。(張り紙を見る)

工藤 トイレじゃないかな？

蛭 あー。待ってていいですか。

工藤 緊急？

蛭 緊急。ああ、まあ、はい。

工藤 あれならあの、戻って来たら伝えとくけど。

蛭 あーやー、ちょっと説明しにくいので、

工藤 ああ。

蛭 待ってます。

工藤 そ。

蛭 これ、なんですか？

工藤 さあ、なんか一生懸命作ってたけど。

蛭 はあ。

工藤 間に合うんかね、公演明日でしょ、演劇部。

蛭 ああ、たしかに。

工藤 あれ？ 演劇部？

蛭 あ、いや、私はバレード部です。

工藤 ああ。

蛭 あ、小道具のことで、ちょっと、はい。

工藤 ああ、借りたいんだ、なんか。

蛭 あいや、そうじゃないんですけど、

工藤 ん？

蛭 ちょっと返してほしいものがあって。

工藤 ああ。

青木がトイレから戻ってくる。椅子の絵の描かれたバッジをつけている。

青木は、蛭のクラスの担任である。

青木 おお、どうした。

蛭 あ、秀葉先生に用事があったって

青木 秀葉先生？

青木、ロッカールームの方へ。

首をかしげながら戻ってくる。

青木 いないね。

工藤 トイレじゃなかったですか？

青木 いや、トイレには誰も。

工藤 ああ。

青木 いや、ロッカーの方に行ったのを見た気がしたんですけど、

沈黙。

青木 気のせいですかね。

工藤 うん。

青木 緊急？

蛭 まあはい。

青木 戻ってきたら伝えるけど。

蛭 あー、説明しにくいんで。

青木 でも今練習中でしょ？ パレード部。

蛭 はい。

青木 戻った方がいいんじゃない？

蛭 いや、大丈夫です。

青木 いや大丈夫じゃないでしょ。

蛭 あーあの、私スタンダードしか出ないんで、もうスタンダードのリハ終わったんで。

青木 そうか……、スタンダードか……（わかってない）

蛭 はい。

青木 まあしかし、ここで待たれてもねー

蛭 ああ。

青木 椅子もないし。

蛭 はい。

青木 まあ、椅子はどこにもないけど。

蛭 はい。

青木 蛭は慣れた？ 椅子がないの。

蛭 ああ、まあ……

青木 そう。

問。

青木 先生は全然なれない。

蛭 はあ。

青木 でも仕方ないんだ。上が決めたことだから。

蛭 はい。

青木 しかしそれでいいのかと。

蛭 え、

青木、自分の机に戻り、バインダーに挟まれた署名用紙を持ってくる。

青木 先生、やっぱり椅子があった方がいいと思うんだわ。

蛭 ああ。

青木 蛭はどう思う。

青木 蛭 え、生徒として、立ったまま、授業を受けるのは、どう？

青木 蛭 あー、まあ、きついですね。

青木 蛭 座りたいと思わない？

青木 蛭 思い、ますね。

青木 蛭 じゃあ、署名して。

青木 蛭 え。

青木 蛭 署名をね、教育委員会に提出しようと思って。

青木 蛭 ああ。

青木 蛭 いい？

青木 蛭 わかりました。

蛭、署名用紙に記入する。

ロッカールームの方から、カンカンと小さく音が聞こえる。

青木 (音が蛭に聞こえないように) あーなんか住んでるのマンションだっけ。あれだったらマンションの名前は省略してもいいから。

青木 蛭 あーもう書いちゃいました。

青木 蛭 あーだったら全然そのままでもいい。

青木 蛭 はい。

青木 蛭 あとなに、あの一、電話番号。これも自宅のでもいいから。

青木 蛭 はい。(電話番号を書く)

青木 蛭 学校から椅子を取り戻そう。

カンカンという音、やむ。

青木 教室発表の方は参加してないんだっけ？

青木 蛭 先生なんか声でかかないですか。

青木 蛭 ……そう？

青木 蛭 はい、なんか急に。

青木 蛭 蛭が署名してくれるのが嬉しくて。

青木 蛭 あ、いや、はい。これでいいですか。(署名を戻す)

青木 蛭 ありがとうございます！ (ざっと目を通して) はい、大丈夫！ ほんとにありがとうございます。

青木 蛭 あいえ。

青木 蛭 じゃあ、そんなあなたに、これ。

青木、椅子の絵が描かれたバッジを渡す。

青木 蛭 え。

青木 署名のお礼に。

青木 蛭 ああ

青木 取り戻そうね、椅子。
蛭 あ、はい。

問。

蛭 秀葉先生こないですね。
青木 そうだね。……工藤先生。工藤先生？

工藤 (ヘッドホンを外して) はい、はい、なんででしょう。

青木 先程あの、秀葉先生がトイレ行ったんじゃないかっていうのは、
工藤 はい。

青木 その、出てくの見てましたんですか？

工藤 ああ、いや、えーと、作業してたのは知ってて、で、あのー、今見たらいなかったんで、トイレかな
っていう。

青木 ああ、じゃあ出たのを見てたわけではない。

工藤 そう、ですね。はい、見てはないです。

青木 ああ……。いやいやそうじゃないわ。

工藤 え？

青木 トイレに行ってきましたっていうことづてが、あつたわけじゃないんですね？

工藤 はい、だから、はい。

青木 ああ。

蛭 ロッカーのところにはいなかったんですよ。

青木 (さえぎるように) ロッカーにはいなかったね。

蛭 ……じゃあ、さっきの音はなんですか？

青木 音？

蛭 なんか、さっきカンカン言っていましたよね。

青木 そう？ 聞こえなかったけど。

蛭 なんか、ロッカーを手で叩いてるみたいな。

青木 工藤先生、聞こえました？

工藤、ヘッドホンをしており気づかない。

青木 (蛭に) 気のせいじゃない？

蛭 いやー……

青木 わかった。じゃあ、見てくる。

蛭 え、いいんですか。

青木 待ってて。

青木、ロッカールームへ急ぐ。

蛭、所在がなくなる。缶バツジを胸につける。

棚、あるいは本棚に置かれているけん玉を何気なく手に取る。

遊ぼうとひっくり返した途端、熟れ過ぎたカキのように、玉がぼとっと落ちる。

蛭 ええー……。

蛭、驚くが、触る気にならず玉の取れたけん玉をそつと本棚などに隠す。
ややあつて、青木が戻ってくる。

青木 蛭！

はいっ！

青木 (なぜか嬉しそう) 猫の陰から象がでる。(諺のように言う)

はい？

青木 (スマホを見せ) 先生のスマホ、バイブになってた。

ん？

青木 先生、スマホを、バイブにしたまま、ロッカーに入れてて。

はあはあ。

青木 それで。

中で鳴って。

青木 そう。

ああ。

青木 秀葉先生、しばらく帰ってこなさそうだから、一旦部活戻りな。来たら伝えとくから。

はあ、まあ、そうですね。

うん。

蛭 それじゃあ、失礼します。

はい。

青木 あ、そうだ先生。

なに。

蛭 先生、いつもスマホ持ってますよね。

青木 ん？

少なくとも、今日のホームルームときは持ってましたよね。

青木 そうだね。あの一、私部活の時はずいぶんよ。スマホ。

え、そうなんですか。

青木 そう、やっぱりあの、見ちゃうから。あると。

はい。

青木 ホームルームのときはね、メモ帳として使ってるから。伝え忘れないように。

はい。

青木 でもほんとはダメだから、他の先生とかには言わないで欲しい。

え？ あ、はい。

青木 頼んだぞ。

頼んだぞ？ はい。たの、まれました。

青木 (缶バッジをさして) 似合ってる。

あ、えへ。

青木 じゃあ、部活戻って。

蛭 はい。(なんとなく職員室全体に)失礼しましたー

蛭、職員室を出る。

青木 工藤先生!!

工藤 (気づいてヘッドホン外す) はい、はい。

青木 まずいですよ。

工藤 はい?

青木 秀葉先生、もしかすると。

問。

工藤 え、ほんとに?

青木 いや、まだはつきりとはもちろんあれですけど

工藤 ええー

青木 だって私見ましたもん。秀葉先生が、ロッカールームに行くところ。

工藤 いつですか。

青木 私が、トイレに行く、ちょうどそのタイミングで。

工藤 ああ。

青木 だから……ああ!(言葉にならない)

工藤 ちよつと、青木先生、落ち着いて。

青木 はい。

工藤 まだ全然、可能性のひとつにすぎないから。

青木 はい。

工藤 だって、第一、……開かないですよ。

青木 ……

工藤 あんな、鎖で、ぐるぐるにしてあるんだから。

青木 そそ、そうですけど。

問。

青木 電話、あ、電話。

青木、スマホで秀葉先生に電話をかける。

物体の影から着信音が聞こえる。

青木 え……

青木、物体の影から、秀葉先生の携帯電話を拾い上げる。

工藤 ああ……

青木 工藤先生、ロッカー、見に行ってもらえませんか？
工藤 え。
青木 お願いします。
工藤 ……いいですけど、でもさつき、青木先生いつてましたよね。
青木 私、もうそっちの方見ないようにしてるんで。
工藤 ああ。
青木 お願いします。
工藤 いいですけど。

工藤、ロッカールームに行く。
青木、気になってしょうがない。
そこに、イライラマックスの戸田先生が入ってくる。
青木、扉の音にびっくりして振り向く。
戸田、怪訝そうに顔をしかめ、そのまま職員室の奥にある、自分の机に。
青木、なんだか悲しくなる。
工藤が戻ってくる。

青木 どうでした…？

工藤、無言で、すごく怖いお札を見せる。

青木 (めちゃくちゃおびえて) ひー
工藤 これ…
青木 はがしたんですか…？
工藤 ……いや剥がしませんよ。はがれてたんですよ。
青木 (すごく怖い) ええー…
工藤 床に、こう、おちてました。(実際にお札を床に置く)
青木 なんで置いたんですか…
工藤 え、いや、状況を説明しようと思って
青木 分かりますよ…
工藤 ああ。
青木 もう…
工藤 すいません。

工藤、お札を拾おうとして、べちゃっと落ちてるけん玉の玉に気づく。

工藤 これなんですか？
青木 え？
工藤 いや、これ…
青木 それも、おちてたんですか？
工藤 え、いや、これは、ここに、おちてたんです。

青木 はあ……
工藤 お札は、向こうに落ちてました。
青木 なんですか、それ。
工藤 いやー……

工藤、けん玉の玉をしげしげと眺める。

青木 お札だけですか？
工藤 え？
青木 鎖とかは、大丈夫だったんですか？
工藤 ああ、はい。
青木 え？
工藤 別に、どうも。あの時のままです。
青木 そうですか。

青木、少し落ち着いてくる。
工藤はまだ玉に興味がある。

青木 私、あの……、コーヒー淹れますけど、工藤先生飲みます？
工藤 え、あー、いや、大丈夫です。
青木 ああ……あの、戸田先生？

青木、戸田の近くへ。

戸田 はい？
青木 コーヒー淹れますけど、飲みます？
戸田 あー
青木 あの私、ドリップ、一個、多くて。
戸田 ああ……。じゃあ、いただきます。
青木 はい。

青木、給湯室へ行く。

戸田 え、なんか……大丈夫ですか？
工藤 はい？
戸田 (青木先生の)顔。真っ青ですけど。
工藤 ああ。あーまあちょっと、
戸田 なんかがあったんですか。
工藤 まあ、そうですね。びっくりしちやっただのかな。
戸田 びっくりしちやっただのかな。
工藤 はい。

戸田
ふーん！

戸田、興味を無くしたように仕事に戻る。
工藤、秀葉の件を戸田に伝えるか悩み、ふがふがする。

戸田
なんですか？

工藤
え？

戸田
いや……なんか、ふがふがしてるから。

工藤
え？ わたし？ ふがふが？ してますか？

戸田
はい。

工藤
ふがふが？

戸田
ふがふがっていうか、はふはふっていうか。

工藤
はふはふ？

問。

戸田
でも、はふはふしている工藤先生、

三年生の野見が入ってくる。

野見
失礼します。3年、野見です。秀葉先生に用があつてきました。

工藤
お。

野見
こんにちは。

工藤
こんにちは。

野見、秀葉を目で探す。

工藤
あ、秀葉先生、今いないんだよね。

野見
あーそうなんですか。

工藤
伝言だったら伝えとくけど、

野見
あー、でもすぐ帰ってきますよね？

工藤
え？

野見
これ。

野見、「物体」を指す。

工藤
ああ。

野見
待ってます。

工藤
いやでもね、あの今、学校の、外に出てんだよね。

野見
え？ なんですですか。

工藤
いやなんか、作ってて、足りないものがあるとかで。

野見 はあ
工藤 さつきでてったからね、ちよつとしばらくかかるんじゃないかな。
野見 えー……八時過ぎますかね。
工藤 かもね。
野見 ええー！
工藤 演劇部？
野見 いえ、きれいな演劇部です。
工藤 ああそっち。
野見 あじゃあ、先生あの、プロジェクター分かります？
工藤 プロジェクター？
野見 はい、あの、映像、映すやつ。
工藤 うん、分かるけど、
野見 学校のやつ借りたんですけど、ちよつと使い方があれで
工藤 ああ、見に行こうか。
野見 ほんとですか、お願いしていいですか
工藤 いいよ
野見 ありがとうございます。
工藤 本番使うの？

青木が、マグカップ二つ持って給湯室から出てくる。

野見 そうなんです。
工藤 あ、青木先生、ちよつと僕、
青木 はい。
工藤 出ますんで。
野見 失礼しましたー
青木 はあい。

野見と、工藤、出ていく。

青木、マグカップをひとつ、戸田の机に置く。

青木 お砂糖とかミルクとかって
戸田 あ、全部なしで、
青木 あ。じゃあ、どうぞ。
戸田 どうも。

それぞれ自分の机の前でコーヒーを飲む。

青木は、ミルクやら砂糖やら入れているし、猫舌なので一生懸命冷ましている。
間。

戸田 あの、青木先生。

青木 はい。
戸田 工藤先生と付き合ってるんですか？
青木 え？

青木、大いに困惑する。

青木 そんな風に見えます？
戸田 いえ。
青木 ……え、じゃあなんで、
戸田 そんな風に見えないから、聞いたんです。
青木 ……付き合っていないです。
戸田 分かりました。

問。

青木 えー、戸田先生そういうの興味あるんですね。
戸田 はい？
青木 いや、戸田先生そういうの全然興味ないと思ってました。
戸田 そういうのって？
青木 ……まあ、恋愛の？ あれやこれやですよ。
戸田 ありますよ、興味。
青木 えー、じゃあ、なんかいろいろ聞いちゃってもいい感じですか？
戸田 ダメです。
青木 恋人居るんですか？
戸田 ダメです。
青木 ええー？ おーしえーてくださいよー（学生ノリのふざけた感じで）

問。

青木、恥ずかしくなる。

青木 ……すみません。
戸田 私、青木先生のそういうところ、羨ましいと思ってるんです。
青木 ……そうですか？
戸田 だって、生徒に人気あるじゃないですか。
青木 ああいやそんな、
戸田 ありますよ人気。
青木 精神年齢がね、同じくらいなんで。
戸田 そういうところが羨ましいです。
青木 ……なんか、意外ですね。
戸田 そうですか？
青木 戸田先生って、きっちり、生徒と教師の線引き、されてるイメージだったので。

戸田 そうかもしれないです。
青木 そういう、主義なんだと思ってました。
戸田 ああ、主義っていうか……だって、何考えてるか分かんないじゃないですか。子ども
青木 まあそうですね……でも、私達だって子どもだったわけだし。
戸田 そうなんですけど。

青木 はい。
戸田 でもわたし、子どもの頃から、他の子が何考えてるかわかんなかったです。

青木 ……はあ。
戸田 青木先生って鹿ですか？

青木 ああいや鶴です。

戸田 あ、じゃあ、いつつ下か……知ってますかね、あの、ブイサックって流行ったの
青木 はいはい！ ありましたね、えーと、

戸田 ブイブイブイ、ブイサックっていう

青木 （合わせて）ブイサック！ ああ！ 私それめっちゃはまってました！
戸田 もうクラス全員やってて

青木 やってましたね！

戸田 もう私なにか面白いのか全然分かんなくて、

青木 ……ああー

戸田 羨ましかったんですよ。これで盛り上がってるクラスメイトが。

青木 ……大人っぽかったんですね。

戸田 違うんですよ。

青木、何を言えば正解か分からず黙る。

戸田 線引きしてるわけじゃないんです。……距離が勝手に。
青木 ああ……

顔面白塗りの釜が職員室に入ってくる。

釜 失礼します。3年、釜です。戸田先生に用があってきました。

戸田 ……

釜 あ、これは、メイクです。

戸田 え？ 方向性、そっち？

釜 あ、これは、演劇部の方です。

戸田 ああ。

青木 え、釜君、演劇出んの？

釜 はい！ あの、助っ人で。

青木 パレードは？

釜 あ、も、出ます。

青木 たいへーん。

釜 はいまあ、でも、楽しいんで。

戸田 なに用事って。

釜 あ、パレード部解散するんで、締めお願いします。

戸田 それ私いる？

釜 いや顧問ですから。

戸田 ……

釜 お願いします。

戸田 はいはい。

青木 それ何役のメイク？

釜 大根の神様です。

青木 楽しみー！

釜 是非、見に来てください。

青木 行く行く。

釜 ありがとうございます！

戸田 はい、行くよ。

釜 はい！ 失礼しましたー。

釜と戸田、職員室を去る。

とたんに寂しくなる職員室。

青木、何かの気配にびくつきながら、自分の机に行き、仕事を始める。

ヒット曲らしきものを口ずさむ。

青木 ♪浮気なエンジェル 僕のところにおいでよ

♪不埒なエンジェル 僕のところにおいでよ

こどものうたらしきものも口ずさむ

青木 ♪おそば おそば おそばには 不思議な力があるんだよ

♪おそばとうどんはにてひなる にてひなる

秀葉の携帯電話が鳴る。

青木、びっくりして逃げるように職員室を出る。

やがて着信音は切れる。

外の音や、誰かを呼ぶ放送などが聞こえる。

野見の父親が、職員室に入ってくる。

野見父と表記する。

野見父 エクスキューズミー…

野見父、職員室を見渡す。

野見父 エクスキューズミー……

野見父、床にひかれたラインが気になる。

野見父 ……はーん……

野見父、ラインを越え、職員室の中へ入る。

野見父、給湯室へなんとなく歩いていく。

舞台上誰もいなくなる。

少しして野見父、「ご自由に」と紙が貼られたクッキー缶を持って出てくる。

クッキーを食べている。

倉庫のカギを取りに来た工藤が職員室に入ってくる。

野見父と目が合う。

工藤 ……え、

野見父 ……***（ご自由になって、と言っているが口の中にモノがあるので不明瞭）

工藤 え？

野見父（咀嚼している）

工藤 誰ですか？

野見父 ……

工藤 どこから、来たんですか？

野見父 ……***（どこから？ と言っているが不明瞭）

やや沈黙。

工藤 あの、ロッカー……

野見父 秀葉先生、

工藤 えっ！

野見父 で、いらっしやる？

工藤 ……いいえ。

野見父 では、どちらに。

工藤 あの、誰ですか。

野見父 ……野見と、申します。

工藤 野見、さん。

野見父 あなたは。

工藤 工藤です。

野見父 工藤さん。

工藤 この、教員をやっておりまして。

野見父 じゃあ工藤先生だ。

工藤 はあ。

沈黙。

野見父 秀葉先生はどちらに、

工藤 (ピンとくる) 野見って、あの、きれいな演劇部の、

野見父 はい？

工藤 野見の、お父さんですか。

野見父 はい。野見の、お父さんです。

工藤 ああ。

野見父、スマホを操作する。

再び、秀葉の携帯電話が鳴る。

しばらく聞いて、野見父、電話を切る。着信音も消える。

工藤 あ、野見さんがかけてらしたんですか。

野見父 ええ。

工藤 ああ。

野見父 携帯電話を携帯せず、どこかに行ってらっしゃるといことですかね。

工藤 え？

野見父 秀葉先生ですよ。

工藤 ああ……。

野見父 どおりで出ないわけだ。

工藤 あの、秀葉先生になにか御用ですか。

野見父 もちろん。

工藤 ええ。

野見父 クッキーを食べに来たと思いますか。

工藤 いいえ。

野見父 これは、ご自由にとあったので。

工藤 はい。

野見父 自由にしています。

工藤 あの、大変申し訳ないんですが、線のこちら側にきていただけませんか。

野見父 線？

工藤 あの、床の、

野見父 どうして。

工藤 あの、いや、そういうルールですの。

野見父 ルール。

工藤 はい。

野見父 ……私は、生徒では、ない。

工藤 はい。

やや、沈黙。

野見父 (あきらめたように) わかりました。

野見父、ラインの外側に出る。

入れ替わるように、工藤がラインの内側に入る。

野見父 なるほど。

工藤 あ、あとクッキーも返していただけませんか。

野見父 ああ。

野見父、線を越えようとするのを工藤、さえぎって。

工藤 あの、私が、

野見父 ……

野見父、工藤にクッキー缶を渡す。

野見父 ご自由にとあったので、自由にしたんです。

工藤 はい。

野見父 そうでなければ、自由にしなかった。

工藤 はい。

野見父 秀葉先生はどちらに。

工藤 今ちよつと、でかけてまして。あの、ちよつと材料が足りないとかで。買い出しに。

野見父 材料？

工藤 あの、これ。

工藤、物体を指す。

野見父 これはなんですか。

工藤 あ、おそらく、演劇部の小道具かと。

野見父 演劇部。

工藤 はい。

野見父 きれいな演劇部ではなく。

工藤 あー、どつちかな。多分、きれいじゃないほうだと思いますけど。あ、きれいじゃないっていうとあれですけど、あの、はい。

野見父 八時までには戻ってきますかね。

工藤 あー……、どうでしょうね……

野見父 しかし八時には、ゲネが始まっちゃうんですよ。

工藤 ゲネ？

野見父 ゲネプロ。ああつまり、最終的なリハーサルです。顧問が立ち会わないというのはおかしいでしょう。

工藤 そう……です……そうなんです、かね……

野見父 しかも携帯を置いている。

工藤 うっかりしたんでしょね。

野見父 うっかり？

工藤 うっかりさんなんです。秀葉先生。……それで、たぶん、急に買い出しを。

野見父 ああ。

工藤 うっかりさんでしょ。

野見父 ……完成しているように見えますけどね。

工藤 え？

野見父 これ。完成してるんじゃないですか？

工藤 どうでしょう。なにを作っているのか知らないのです。

野見父 ああ。

工藤 これ、なんでしょうね。

野見父 知りませんよ。

工藤 すいません。

野見父 私が知ってるわけじゃないですか。

工藤 すいません。……完成してるように見えると、おっしゃったので。

野見父 ええ？

工藤 完成してるように見えるということは、完成の状態を知っているということかな、と。

野見父 ああ。

工藤 すいません。

野見父 あ、いや、私はただ……完成している、雰囲気があるなと思っただけで。

工藤 雰囲気。

野見父 雰囲気。ふいんき？

工藤 雰囲気。

野見父 雰囲気。雰囲気が、あるじゃないですか。なんというか、じゃーん！ というか。

工藤 ……

野見父 どうだー！ みたいな。生まれましたー！ っていう。

工藤 そうですかね。

野見父 しませんか。

工藤 私には、まだ、未完成って感じに、見えます。

野見父 ……

工藤 いや、もちろん、分かりませんが。

しびれをきらした野見が入ってくる。

白塗りである。

野見 失礼します、工藤先生に……

野見、父を見て絶句。

工藤 ああ、すまん。カギな。
野見 (めちゃくちゃ不機嫌な声) はい。
工藤 ……ん？
野見 あの、先行っててもらっていいですか。
工藤 え、あ、いや……
野見 時間ないんで。
工藤 あ、……うん、わかった。すぐ、来いよ。

工藤、圧倒されて、倉庫のカギを取り出すと、逃げるように去る。

野見 なんていんの。
野見父 ……
野見 なにしにきたの。
野見父 ……あ、いや……
野見 なに？
野見父 僕、あの、明日からちよっと、出張で、
野見 はあ。
野見父 だから、ゲネ、見せてもらおうかなって。
野見 なんてゲネあること知ってるの。
野見父 あ……それは、あの、秀葉先生に、
野見 秀葉先生と連絡とってんの
野見父 連絡とってるってほどは、とってないけど、
野見 いやでもとってるんでしょ。
野見父 と、らざるをえん、ときはね。
野見 はあああああ(大きなため息)
野見父 いやいや、あるだろう、娘の部活の顧問と、連絡、
野見 娘。
野見父 ……娘だよ、娘じゃないか。娘だろ？
野見 娘、かも。
野見父 かもって、おいおい。
野見 ちっ(大きめの舌打ち)
野見父 ……(白塗りを)それは、演劇のやつか
野見 きれいな演劇ね。
野見父 ……きれいな演劇も、それ、塗るんだな。
野見 まあ演劇だし。
野見父 そういうもんか。
野見 ……帰って。私戻んなきゃいけないから。
野見父 いや、ゲネを……
野見 いや、外部の人とか無理だし、
野見父 外部の人って
野見 とにかく、無理だから。

蛭と釜が入ってくる。

釜は、より大根の神様らしい格好になっている。

釜 失礼します。秀葉先生に用があつてきました。3年釜です。

蛭 3年蛭です。

野見 いないよ先生。

釜 ええー

野見 パレード部が、うちの秀葉になんですか。

野見父 お友達？

野見、野見父を無言でにらみつける。

釜、物体を見て。

釜 これもういいのかな。

蛭 これなに？

釜 や、小道具。劇の。

蛭 へー

野見 こういうのをね、顧問にやらせるんですよ演劇部は。

野見父 まだ未完成らしいよ。

釜 え。

野見父 それ。まだ未完成だって。

釜 ……はあ。

野見父 私には完成してるように見えるんだけどね。

野見 もう行こ。いないから、秀葉。

蛭 のみこ、この人は、誰？

野見 知らない。

野見父 おいおい知らないって、

野見 行こう。

釜 お父さんですか？

野見父 そうです。

野見 違います。

釜 野見さんの。

野見 父は死にました。

野見父、ゆっくりと幽霊のポーズ。

野見、そんな野見父をにらみつける。

野見父、ポーズをやめる。

釜 お父さんですよね？

野見父 (無言で曖昧にうなづく)

野見 だったらなに？
釜 いや先生じゃないなら、ねえ。
蛭 うん。
野見 なに。
蛭 いや、私、秀葉先生、ずっと探してるんだけど、いなくて。
野見 うん。
蛭 さつきもここ来たんだけど、なんか……、思っただけど、秀葉先生、ロッカーしちやったんじゃな
い？
野見 ……え、まじ？
釜 いやまじでこれ、シユラクくない？
野見 いやまじならシユラいけど、え、てか、シユラっていうか、どうすんのマジだったら。
蛭 いやだから、マジかどうか確認しようと思って。
野見 ……ああ。

生徒三人、野見父を見る。

野見父 ん？
釜 説明して。
野見 いやよあんた説明してよ。
釜 え、お父さん
野見 父は死にました
釜 じゃああれ誰よ
野見 父、の、ようなものよ。
釜 なんだよそれ
野見 なんかあれよ、ジェネリックよ。
釜 ジェネリック？ 父の？
蛭 釜君あのね、のみこの家庭は複雑なの。
野見 なんから人から言われるとちよつとやなんだけど。
蛭 だってほんとのことじゃん。
野見 そうだけどさ。もうきらが説明してよ。

三人、再び野見父を見る。

野見父 ……ん、
蛭 あのですね。
野見父 うん。
蛭 その先に、ロッカールームがあるんです。
野見父 あるね。
蛭 ロッカールームには、ロッカーがあるんです。
野見父 だろうね。
蛭 はい。

野見 当たり前じゃん。
蛭 行ってきてもらえませんか？
野見父 ……ん？
蛭 ロックールームに。
野見父 ……ん？
釜 ああ、だからですね、えーと、ロックールームに、なにかあると思うんですよ。
野見父 なにか？
釜 その…ワープゾーンというか。別の世界への、扉、みたいなものが。

問。

野見父、朗らかに笑う。

野見 笑ってんじゃねえよ。
野見父 ……。別の世界への、扉。
釜 はい。
野見父 なるほどそれで？
釜 秀葉先生はそっちに行ってしまったんじゃないかと。
野見父 買い出しに行っただんじやなくて。
蛭 買い出し？
野見父 うん。
蛭 買い出しに行っただって誰が言ったんですか？
野見父 えーとあの、(野見に)ほら、さっきの先生。
野見 工藤先生
野見父 工藤先生が、うん。
蛭 はいはいはい…これ秀葉先生、確実にロックールームに落ちちゃってるねえ
野見 しちゃってる
蛭 しちゃってるねえ
野見父 なんだその、ロックールームに落ちちゃってるって言うのは
釜 ……ロックールームに行っただんじやねえか。
野見父 え？
釜 ロックールーム。おじさんなら、行けるんだ。
野見父 いったらどうなるんだ。
釜 それを確かめに行っただほしいんです。

問

野見父 でも、異世界への扉があるんだろ？
野見 ないよ。
野見父 え？
野見 ないよ異世界とか、なにいつてんの。あるわけないじゃん、ばかじゃないの。
野見父 え、だって、

野見 ないけど、先生たちがなんか隠してるのは確かだから、それを確かめて来いって言うてるの。
釜 ちよつと野見さん、

野見 あと、釜君が言ったのは別の世界への扉。異世界とか言ってるから。なに異世界って。恥ずかしくないの。

野見父 お、おんなじようなもんじゃないか。

野見 ぜんぜん違う。

蛭 (釜に) え揺れてない? (一人震度を感じる)

釜 え?

野見 とにかく私たちはロッカールームにはいけないから行ってきて。

野見父 なんで、

蛭 ほら、ほら、

野見父 行けばいいじゃないか、ロッカールーム。

野見 はあ?

野見父 いや……

野見 私たちはいけないの。見たらわかるじゃん。

野見父 なんで。

野見 書いてあるでしょ?

野見父 書いてあるけど、

野見 書いてあるでしょ!

野見父 書いて……あるけどさ……

野見 なに

野見父 じゃあ僕も無理ってことになるんじゃない?

野見 あなたは生徒じゃないでしょ?

野見父 いやでもダメって言われたんだよ

野見 誰に。

野見父 先生だよ。

野見 なに先生よ。

野見父 ほらあの、くく、工藤先生!

野見 ……なんて言われたの?

野見父 入らないでくださいって。

野見 生徒じゃないのに?

野見父 そうだよ。

野見 おかしいじゃん。

野見父 いやおかしいと思っただよ。

野見 じゃあ論破しなさいよ論破。

野見父 ええ?

野見 論破よ論破。ロンパロンパ。

野見父 じゃ、じゃあ言わせてもらおうけどさ。別に、生徒だからって、いいじゃないか、その線越えることくらい。

野見 だからそれはダメって書いてあるでしょ?

野見父 書いてあるだけなんだよ!

野見 ……はー。(蛭と釜に) もう行こう。

釜と蛭、何も言えない。

野見 話通じないからこの人。行こう。

蛭 えー

野見 いやまじごめんて。

蛭 うーん

野見 うん……

間。

野見父 見に行けばいいんだな。

野見 もういいよ。

蛭 そうですそうです。

野見父 ロックカールームをね。

蛭 はい。

釜 あの、写真も撮ってきてもらえると

野見父 写真。

釜 あのはい。

野見父 いいよ。写真ね。

野見父、ラインを超える。

野見父 ふっつーのロックカールームだった場合も写真、いる？

釜 はい。

野見父 うん。

野見父、ロックカールームへ去る。

無言で見守る三人。

蛭 あのさ。

野見 なに。

蛭 さっき、ちょっと揺れたよね？

野見 え？

蛭 気づかなかった？

野見 揺れたって？

蛭 地震よ。

野見 え、全然分かんなかったけど。(釜に) 揺れた？

釜 いやー

野見 ああ。

釜 ……きれいな演劇部、ゲネ、八時？
野見 うん。
釜 わざとでしょ。
野見 なにが。
釜 演劇部のゲネにぶつけたんじゃない。
野見 たまたまだよ。
釜 うちは、俺のスケジュールに合わせて、八時になってんの。
野見 それが？
釜 そっちはこんな遅くからする必要ないじゃん。
野見 勝手にでしょ。
釜 秀葉先生困ってたよ。
野見 関係ないじゃん、あんたバレード部でしょ。
釜 いや関係はあるよ。野見さん達がやめちゃったから人数足りなくなって、それで俺が
野見 はいはいすいませんでした。
蛭 やーめーてー（スマホを見せる）ほら見て、地震。やっぱり揺れてました。震度1。

問。

釜 ちょっと（ラインを指し）これ、越えてみる？
野見 なんで。
釜 先生いないし。
野見 いや居ないけど、だめでしょ。
釜 だめか。
野見 だめよ。
釜 遅くない？ お父さん。
野見 死んだんじゃない？
釜 おいまじでそういうこと言うなって。
野見 は？

戸田が入ってくる。

戸田 なにしてんのあんたたち。
釜 あ、先生。
戸田 青春は、治外法権じゃないぞ。

野見父がロッカールームから出てくる。

戸田 ……どちら様ですか？
野見父 ……あ、いや、
戸田 どこから来たんですか？
野見父 どこから？

戸田、生徒三人を見るが、三人とも目をそらす。

戸田 どこか、別の世界から、いらっしやったんですか……？

野見父 ……そうです……

戸田 はああああああ……

野見 違います私の父です。

全員、野見を見る。

野見 (野見父に) そういうのいないから。

野見父 野見の父です。

戸田 はあ……

野見父 娘がいつもお世話になっております。

戸田 ロッカールームでなにをしてらっしゃったんですか？

野見父 なに……

戸田 とりあえず、線のこちら側にきていただけますか？

野見父 線って？

戸田 床の。

野見父 どうして。

戸田 規則ですから。

野見父 私は、生徒では、ない。

戸田 わかっています。

野見父 ……生徒ではないんだよ。

戸田 生徒でなくても、外部の方はおはいいただけません。

野見父 外部って、保護者ですよ。

戸田 保護者の方であっても、ともかく、線のこちら側にきてください

野見父 あのロッカーはなんですか。

戸田 ……はい？

野見父 あきらかに、ひとつ、異常なのが、ありますね。

戸田 ……ご覧になったんですか。

野見父 はい。写真も撮りました。一面にお札がびっしり貼られて、

戸田 はああああああああああ

全員、ぎよっとする。

野見 すごい声が出たね。

蛭 世界が終わったのかと思った。

戸田 ガマー

釜 はいっ

戸田 明日は何の日だ。

釜 え……と、文化祭
戸田 そうだ。……文化祭だなあ。
釜 はい。
戸田 釜は、文化祭、成功させたいかあ。
釜 はいっ。
戸田 私もだ、釜。
釜 (意図が分からない) はい……
戸田 (野見父に) 生徒もこういつてますし、この件は後日改めてあれさせていただけませんか。
野見父 え
野見 先生それは
戸田 君たちも今日はもう帰りなさい
野見 それはできません。明日の準備が
戸田 明日の準備があるなら全て忘れて明日の準備に励め
野見 秀葉先生がロッカーされちゃったかもしれないんです！

問。

蛭 ほんとです。
戸田 秀葉先生は、買い出しに行ってる。
蛭 行ってません。
戸田 ああ？
蛭 車がありました。
戸田 ……歩いていったんじゃないかな。
蛭 あの体ですか？
戸田 ……そうだね。
野見父 ロッカーされるって、なに？
釜 ああ、ええと……
野見 いいよ知らなくて
釜 別の世界に行っちゃったんじゃないかっていう……
野見父 ああ……
釜 写真、見れます？
戸田 見せないでください。

野見父、スマホを操作し、釜に見せようとする。

野見父 あれ……
釜 撮れます？
野見父 いや……4、5枚撮ったんだけどね……

野見父、スマホの画面を見せる。真っ暗。

釜 え？
野見父 なんか、全部こうなんだよ。

蛭と野見もスマホの画面を見る。

野見 指がかかってたんじゃないの。
野見父 でも真っ黒だよ。
戸田 なんにも写ってないんですか。
野見父 ええ。……なんなんですか、あのロッカー。
戸田 なんなんって、……言われても、
野見父 誰のロッカーなんですか。

間。

釜 水柿先生のロッカーです。
野見父 水柿先生。
蛭 失踪した先生。
野見父 失踪？
釜 担任だったんです。俺らのクラスの。
野見父 失踪したんですか。
戸田 はい……ご存じないですか。
野見父 ええ……。
戸田 あの、一応保護者の方にも、校長の方から、お手紙を、
野見父 ああ……あ、先月、父になったものですから。
釜 ええっ
戸田 ああ。……そうでしたね。

釜、蛭たちに小突かれるなどする。

野見父 ですからその、失踪というのは、つまり、
釜 ロッカーの中に消えちゃったんです。
戸田 そんなことあるわけないでしょう。
蛭 じゃあ秀葉先生はどこに行っただんですか。
戸田 それは、
蛭 二人目の被害者なんじゃないんですか。秀葉先生。

青木が号泣しながら入ってくる。
あまりのことに、全員、言葉を失う。

戸田 あ、あの、青木先生……

青木、声を抑えようとするが泣きやめない。

野見父 (たまらなくなつて) 一旦、で、出ようか……

なんとなく生徒三人、野見父の言葉に従う。

口々に小声で「失礼します」と言つて、部屋を出る。

野見父 (戸田に) ちょっと、あの、どつか……(去る)

青木が号泣する中、困り果てる戸田。

なにも出来ず、去ることも出来ず、声もかけられず、

戸田 あの、私、そろそろ帰ろうかなつて……

泣き声、やまない。

戸田 ……もうちょっと、いまいしょうかね……

しかたのない沈黙。

青木 椅子が……

戸田 はい？

青木 椅子が……

戸田 椅子、はい、椅子が、どうしました？

青木 椅子が、ない……

戸田 椅子が、ない。はい、椅子は、はい、ないです。

青木 戸田先生は、椅子がなくても平気なんですかあ？

戸田 え、いや、うーん、そうですね、

青木 だってバッチつけてないじゃないですかあ！

戸田 ああ、バッチ……

青木 椅子がないのっておかしくないんですか？ おかしいのは私ですか？

戸田 あの、なにか、言われたんですか？ 誰かに。

沈黙。

青木 ……工藤先生に、

戸田 はい。

青木 言つたんです。バッチ付けてないですね、つて。

戸田 ……はい。

青木 そしたら、こういうのはやめたほうがいいと思いますつて、

戸田 はあ、

青木 生徒に勧めるのもどうかと思いますって、
戸田 はあ、
青木 これ以上続けるなら別れますって、
戸田 ……え、付き合ってるんですか？
青木 (まだまだ泣いている)付き合ってますう！
戸田 おうふ……
青木 椅子は椅子……恋は恋……
戸田 (あきれて)そんなことで……
青木 これあの、他の先生には、内緒で……
戸田 はあ。
青木 内緒で、付き合ってるので……

問

戸田 でも青木先生、秀葉先生と付き合ってますでしたっけ
青木 ……え？
戸田 違いました？
青木 付き合っていないです……
戸田 ああ。
青木 そんな風に見えました？
戸田 いえ
青木 ……戸田先生って、ほんとに、そういうの、好きなんですね。
戸田 好きですよ。
青木 意外です。
戸田 ……でしょうね。
青木 でも、(ちよつと笑って)秀葉先生とは付き合わないですよ。
戸田 そうですか？
青木 え、だって、想像できなくないですか？ え、できます？ 想像。
戸田 いや……
青木 いやー、秀葉先生は無理だなー。ないですね、絶対はない。

沈黙。

青木 や、だからってあれですよ。このままでいいとか思っていないですからね。
戸田 え？
青木 付き合うのは無理ってだけで、別に嫌いとか、いなくなっただけかそういうあれじゃないですか
戸田 ああ……
青木 ……あれ、もしかして、聞いてないですか？
戸田 いや、えっと……秀葉先生の、ことですよね。
青木 はい。

戸田 ロッカー……

青木 (食い気味に) です。はい。

戸田 さつき生徒がそれで、

青木 生徒？

戸田 パレード部の、

青木 蛭。

戸田 はい。

青木 あー。

戸田 ……本当なんですか？

青木 いや、もちろんその、百パーってあれじゃないですけど、

戸田 はい、もちろん。

青木 でもその、ま、……多分。

戸田 ああ……

蛭と釜が入ってくる。

蛭 失礼します、3年蛭です。

釜 3年釜です。

蛭 あの、パレード部なんですけど、演劇部に、小道具を貸してたんですけど、返ってこなくて、明日使うので返してほしくて、最初、秀葉先生に言おうと思ったんですけど、秀葉先生がいなかったの、待ってたんですけど、全然見当たらないので、演劇部に言ったんですけど、きれいな演劇部が持ってたので、ちょっと探してもいいですか。

青木 ん、ん、ん？

釜 あの、パレード部の小道具をですね、秀葉先生が保管してるって聞いたので、取りにきました。

青木 小道具ってなに？

蛭 骨です。

青木 骨？

蛭 はい。

青木 骨って、

釜 骨ですね。あの……(手でジェスチャーする)

青木 かわいい感じの？

蛭 はい。

青木 うーん。ちょっと、待って。

青木、秀葉の机周りを探すが、それらしいものは見つからない。

戸田 野見さんは？

釜 あ、なんか、お父さんと、

青木 ないなあ

蛭 あー

青木 部室じゃないの？
蛭 はい。
青木 骨でしょー？
蛭 ロッカーじゃないんですか？
青木 ああ、ロッカーね……

青木、あることに思い当り、戦慄する。

蛭 ロッカー、見てきてもらえませんか？

青木 ロッカー

蛭 秀葉先生のロッカー

青木 秀葉先生のロッカー

蛭 はい。

青木 あー

釜 明日必要なんです

青木 ああ？

釜 骨が。

青木 骨が。

釜 はい。

青木 パレードに、

釜 はい！

戸田 私行ってきます。

青木 戸田先生ちよっと待ってもらっていいですか。

戸田 え？

青木 (鬼の気迫) ちよっと。

戸田 (気迫に飲まれる) ……

青木 ……なんで、骨が、いるの

釜 いや、小道具として、

蛭 人類の進化がテーマなんです。

青木 うん。

蛭 こう、骨を持ってですね、「うほうほう！うがが！うがが！」ってやるんです。

青木 誰が。

蛭 私です！

青木 おう。

釜 その、こんなに説明する必要がありますかね。

青木 あ？

釜 いや、その、ちよっと確認してほしいっていうだけなんですけど、

青木 ……

釜 やっぱり、ロッカールームになにかあるんですか

青木 (食い気味) なんもない。

釜 でも……

青木 なんつつもない

問。

戸田 なんもなくはない。

青木 戸田先生

戸田 なんもなくはないんだけどね、ただ、あなたたちには知られたくない。
釜 どういうことですか。

戸田 いやもう、そのまんまの意味よ。

釜 同じ学校で過ごしてる以上、俺たちにも知る権利はあるんじゃないですか。

戸田 生意気を言うな。

釜 生意気って、

戸田 君たちはね、どうせ三年で出ていくの。私たち教師は、残るの。

釜 そりゃ、そうですけど、……でも、骨が必要なんです。

青木 わかった。……行ってくる。

蛭 ありがとうございます。

青木 その代わり二人は職員室の外で待ってなさい。

釜 え、

蛭 分かりました。

青木 よろしい。

蛭 行こう。

釜 いいの。

蛭 うん。

二人 失礼しましたー

釜と蛭、職員室から去る。

青木 戸田先生、

戸田 すいません、

青木 え？

戸田 なんか、対立するようなこと言ってしまって、

青木 あ、いえ、それはまあ、あれなんですが……

戸田 え？

青木 考えたことがありまして、あ、考えたというか、思いついたというか、

戸田 はあ

青木 ほんとに思いついたただけなんで、全然あれなんですけど、

戸田 なんですか。

青木 あの……水柿先生は、水柿先生のロッカーに、ロッカーしちゃったんですね。

戸田 ……まあ、だからあれだけ嚴重に、鎖でぐるぐるにして、
青木 ですよ。

戸田 うん。

青木 てことはですよ。秀葉先生は秀葉先生のロッカーに、ロッカーされちゃったってことはないですか。
戸田 ……ちよっと待って、
青木 はい。
戸田 実はこの件、私よく知らなくて、
青木 はい。
戸田 そもそも水柿先生が、水柿先生のロッカーにロッカーされちゃったっていうのは、確実なんですか？
青木 見た人がいるんです。
戸田 見た人？ ……誰？
青木 校長です。
戸田 校長？
青木 はい。もう、まさに、その瞬間を見たって。
戸田 瞬間って？
青木 いやだから…

青木、「水柿先生のロッカーから長い大きな舌が出てきて、水柿先生を捕えてロッカーの中に引きずり込み、扉がボタンと閉まり、ガタンガタン！」と震えた後、げふー、と少しだけ扉が開いてげっぷをする」マイムを上手に行う。

戸田 え、ちよ、ちよっと、え？
青木 はい？
戸田 え、そんな……そんな、面白い感じなんです？
青木 いや私も実際に見たわけじゃなくて校長が、
戸田 校長が今のをやったんですか？
青木 いやいやそうじゃないですけど……話をまとめると、ですよ。
戸田 はあ……
青木 なんですか？
戸田 いや、なんか、想像してたのと、違って……
青木 ああ。
戸田 はい。
青木 え、逆に、どんなの想像してたんですか。
戸田 どのなの。
青木 はい。
戸田 ええ？ ……どんなのって言われると、あれなんですけど、こう……開けたとたん、ブン！ みた
いな……

ブン！ は、ノイズを残して一瞬にして消える、みたいなことです。

青木 (吹き出す) ええ？
戸田 いや、その、よく知らないので、
青木 いやだって、人が、ブン！って……なりませんよ
戸田 いやそれ言ったら……ええ……？

青木 あのと私が言いたいのは、ロッカーされ方のデイトールじゃなくてですね、秀葉先生は秀葉先生のロッカーにロッカーされたんじゃないかってことです。

戸田 ああ……

青木 大事なのはここなんです。

戸田 つまり、二人とも、自分のロッカーに、ってことですよね？

青木 そうですだって、水柿先生のロッカーは、鎖でぐるぐるなんですから。

戸田 お札も貼ってるし。

青木 びっしり貼ってます。

問。

戸田 そうなるとですよ、

野見父が入ってくる。

野見父 エクスキューズミー。

青木、戸田、固まる。

野見父 あのちょっと、お伝えしなきゃというか、お詫びしなくちゃいけないことがありまして、
青木 なんですか。

野見父 あ、……（戸田に）もう大丈夫なんですか。

戸田 え？

野見父 いや……ああ、いやいや全然……（何か一人で納得し）まあ、色々ありますわね。教師といえども、
一人の人間ですし。決してスペシャルなね、あれじゃないんですから。

青木 （泣いていたことを言われていると気づき）あ、あの、

野見父 お詫びしたいというのはですね、あ、なんですか？

青木 あ、いや、あの、どうぞ。

野見父 ……お詫びしたいというのはですね、あの、写真のことなんですけど、

青木 写真、

戸田 写真ってさっきのあの写真ですか？

野見父 ええ。

戸田 真っ黒だったんですね？

野見父 そうなんです、真っ黒で。それがね、どうもレンズがバカになっちゃったみたいで、もう、何撮っても真っ黒です。いやこれ、何枚か試し撮りしてみたんですけどね。（スマホを見せる）

戸田 ああ……

野見父 ほんとにね、猫の陰からなんとやらで、なんか、それなのに騒いじゃって申し訳なかったなと思いついて、これはちょっと、きちんとね、ご報告がてら、お詫びしなくちゃと思いついて。

戸田 いえ……

野見父 まあ、だがしかし？ すごいロッカーだなとは思いますがね。なんなんですかあれは。

青木 ロッカー？

問。

青木 え、ロッカーの話ですか？

野見父 はい。

青木 ロッカーの写真を撮ったんですか？

野見父 いや、撮れなかったんですよ真っ黒で。

青木 なんで撮ったんですか？

野見父 いやだから撮れてなくてですね、

青木 ロッカールームにどうして入ったんですか！

野見父 ……

青木 部外者なのに、

野見父 あのね、皆さんね、部外者部外者いいですけど、部外者じゃないですよ。親なんですから。大事な子

どもの、大事な時間を、預けてるんです。一緒に、育ててるんです。部外者じゃないんです。

青木 それでもルールは守って頂かないと困ります。

野見父 ルール？

青木 ここから先は入らないください。

野見父 ……それはまあ、申し訳ないと思ってます。

青木 はい。

野見父 ただ私にも、事情があるんですよ。

青木 なんですか。

野見父 娘に嫌われている。

青木 ……はあ……

野見父 まあ娘と言っても、あの子にとっては、5人目の父親ですから、まあ、なんかあれでしょうけど。

戸田 5人目。

青木 らしいです。

野見父 まあ、だからこそっていうか、できるだけ父親らしくというか、まあ、ある意味では父親らしくなく、

いい意味で父親らしいという、そんな父親になりたいと思って……思ってるんです。

青木 ええ。

野見父 ただまあ……なかなか……それで、今日も実は、明日の文化祭仕事でいけないものですから、娘の演

劇、あ、きれいな演劇の、ゲネをね見せてもらおうかと思ってきましたが……

青木 ああ。

野見父 まあ、断られたんですが。それで、娘に、お願いされました。その、ロッカールームを見てきてほし

いというか、ちょっとその、噂の真相を、突き止めたいと言われました、

青木 はい。

野見父 生徒じゃないんだから大丈夫だと言われまして、私もその、そういうもんかなと……

青木 ああ……

野見父 ちょっとその、いいところを見せたくてですね……

問。野見父の相談を聞くような雰囲気になる。

青木 分かりました。

野見父 (ほっとして) ああ。

青木 まあ、野見さん。そうですね。どちらかと言うとね、優等生タイプというか、真面目ですし、まあ、だからこそ、こうため込んだりうところがあのかなとは、はい。

野見父 ええ。

青木 年齢的にも色々多感な時期ですし、そもそも野見さんのご家庭、色々こう……チャンプルー

野見父 チャンプルー……

青木 はい、あの……沖繩の……

野見父 はい。チャンプルー……そうですね。確かに。

青木 でもその、順調なご家庭って、ないですよ。

野見父 ああ。

青木 平気そうに見えても、まあ、色々ありますから。

野見父 ええ……もともとは家庭教師だったんです。

青木 え？

野見父 家庭教師として、野見さんのお宅に。

青木 はあ。

野見父 その頃はすごい、なついてくれてて、なんか、こうすり寄ってくるというか、ボディタッチっていうんですかね、まあその恋心的なものをね、抱かれてるなーみたいなことは気づいてたんですけど、(顔が曇ってくる) はい。

野見父 僕はあるまり年下は興味がなくて、まあ結果、お母さんの方と、そういうことになっちゃったわけで、

青木 ……

野見父 だからまあ……そういうのも、あるのかなって。

問。

野見父 っていうお話です。

釜が入ってくる。

普通の格好に戻っている。

釜 失礼します3年釜です。あの……、ちょっと誰先生でもいいんですけど

野見父 始まる？ ゲネ。

釜 いやそれがもう、それどころじゃなくてですね。あー、

戸田 どうした。

釜 いやちょっと、喧嘩が……

戸田 喧嘩？ 演劇部？

釜 はい、あ、いや、ていうか、きれいな演劇部と演劇部で、最初はなんか、幕の？ 取り合いみたいなのでちょっと言い争ってたんですけど、だんだんきれいな演劇部の人たちが、演劇部に戻りたい、みたいなこと言い出して、それで、

戸田 喧嘩。

釜 はい。なんかもう、たぶんあれ、ちょっと誰か行かないと、ちょっと……あ、工藤先生がいいと思う

んですけど、

戸田 工藤先生、

釜 はい、なんか、プロジェクターが、やっぱりあんまりらしくて、なんかそういうトラブルもあって、ちよつともう、ゲネとかできないと思うんですけど、

野見父 ええ……

戸田 (青木を見る) 工藤先生って今、

青木 さあ

戸田 私行ってきます。

釜 あ、戸田先生。

戸田 なに、

釜 自分、一瞬ここいていいですか。

戸田 え？

釜 なんか、もう、ちよつと、

戸田 ああいいよ。(青木に) 工藤先生探してきます。

戸田先生、去る。

釜 はあ……

青木 メイクとっちゃったんだ。

釜 いやもうゲネやらないなら、さつさと帰りたいんで。

青木 お疲れだね、

釜 助っ人するのはいいんですけど、いやー、きついですねーああいうのは。

釜、うろうろして、

釜 やつぱこういうとき、椅子ないのシユラいつすね。

青木 ……そうだよね。

釜 はい？

青木 椅子、必要だよね？

釜 はい。

青木 釜きゅん！

釜 あ、でも俺、署名はしませんから。

青木 なぜ。

釜 え、だって……内申点に響くんぞ。

青木 え……？ 響かないよ。

釜 いや響きますよ。

青木 なんですよ。

釜 えだって、教育委員会のやつに、反抗してるってことじゃないですか。

青木 や……でもさ、いるよね、椅子。

釜 まあ……そうなんすけど、でも、どうせ卒業するし。

青木 え？

釜 どうせ三年で出ていくんで、俺ら。

青木 ……

釜 おんなじなんですよ、俺らにとっては。この線も、椅子も。

野見父 おんなじ？

釜 ああ、はい。

野見父 おんなじって？

釜 ええ？……ああなんか、うまく言えないんですけど、

野見父 うん。

釜 だって……どうにもならないじゃないですか、別に。

野見父 別に？

釜 別に……たとえば、線をなくしてほしいって署名運動して、なくなります？ この線。……青木先生。

青木 ん？ ああ……うーん……

釜 そういうことです。

野見父 はあ……

釜 (物体をしめして) これもそうですよ。

野見父 これ？

釜 これ、なんなのか聞いたんですよ、演劇部に。

野見父 なんなの？

釜 いや、それが、……演劇部も良くわかってないらしくて

野見父 あ？

釜 なんか、練習見てた秀葉先生が、急に、ちよつと作るからって言って、

野見父 ええ？

釜 だから、秀葉先生しか知らないんですよ。これがなんなのか。

野見父 へえ……でもさ、釜君も、でるんだよね、演劇部。

釜 はい。

野見父 なんか思いあたるあれはないの。

釜 いや、俺、自分の出るシーンしか、脚本読んでないんで。

野見父 ええ？ ……そんなんで、やれんの。

釜 はいまあ、ワンシーンだし。

野見父 へえ……なんか、プロっぽいね。

釜 そうすか。……あでも、野見さんにはめっちゃ切られましたけど

野見父 なんて？

釜 いやなんか、演劇のこと全然分かってない、って、

野見父 ああ……

問。

野見父 演劇が好きすぎるんだろうね。

釜 ……そうですかね。

野見父 ん？

釜 どっちかっていうと……秀葉先生が好きなんじゃないですかね。

野見父 そうなのか。

釜 んー、だって、結局きれいな演劇部も、要するに構って欲しいっていうあれだと思っただけですよ。

野見父 秀葉先生に、

釜 はい。だって、……きれいな演劇ってなんですか？

野見父 ……うーん……

釜 （青木先生に）なんですか？

青木 あ、私、演劇のことそもそもそんなに……

釜 ああ。

青木 あ……あれかな、純文学、みたいなことかな。

釜 純文学。

青木 うん。文学と、純文学。

釜 純演劇ってことですか。

青木 うん、まあ……わかんないんだけどね。

野見父 きれいな演劇部の人たちは、なんて言ってるの。

釜 いや別に……だから結局、そんなちゃんと考えてないんすよ、あいつら。

野見父 ああ……

釜 このままだと、明日、野見さんの一人芝居になるんじゃないですかね。

野見父 え。

釜 いやわかんないですけど、でも野見さんは、一人でもやるって言ってました。

野見父 一人でも。

釜 はい。

野見父 ゲネ、やるかな。

釜 今日はやんないんじゃないですかね。

野見父 そうか……

釜 見たいんですか。

野見父 そりゃね。父親だし。

釜 でも、先月からでしょ。

野見父 ……そうなんだけどね。

釜 なりたいんですか、父親。

野見父 うん。

釜 まあ、無理でしょうねー

野見父 ……やっぱりそう思う？

釜 まあ少なくとも、きれいな父親は無理でしょうね。

野見父 きれいな父親。

釜 純父親ですよ。

野見父 ……秀葉先生は、きれいな先生なのか？

釜 え？

野見父 純先生、なのか？

釜 さあ……

野見父 （青木先生に）どうなんですか？

青木 まあ違うでしょうね。

問。

野見父 はあ

青木 私も違いますし。

蛭が入ってくる。

蛭 失礼します、3年蛭です。釜君、演劇部ゲネやるかもって。

釜 まじかーしゅれー

野見父 きれいな演劇部は？

蛭 知りません

野見父 ああ

釜 メイク落としちゃったよー

蛭 いやそれがね、なんかその、もうロッカーされちゃってるなら、自分たちでやるしっていう。

釜 ああ？

蛭 ことみたいよ。なんか。

釜 どゆこと？

蛭 だから、秀葉先生がロッカーされちゃってるなら、もう待っても仕方ないから、やるって。

釜 ああ……（物体を指して）これは？

蛭 これも、ロッカーされちゃってるなら、なんだか分かんないし、別になくても演劇は出来るからって

釜 ああ。

蛭 ただ、帰ってくるなら、待たなきゃいけないんじゃない？ っていう。

釜 ああ……

蛭 というわけで、どうなんですか？ ホントの話。

青木 え？

蛭 ロッカーされちゃったんですよね、秀葉先生。

青木 ……

蛭 骨の件も解決してないし、せめてどっちかあれしてもらえませんか。

青木 ……あのさ、仮に、秀葉先生がロッカー……されちゃったとしてさ、そんな軽いあれ？

蛭 はい？

青木 もっとその……心配するとか、

蛭 え、じゃあロッカーされてるんですね？

青木 いやそれは……

野見父 青木先生、

青木 はい。

野見父 そういう風に、なんでもかんでも、先生だけで解決しようとするから、椅子がないんですよ。

青木 え？

野見父 椅子を、取り戻しましょうよ。椅子という名の……信頼を……

問

野見父 椅子という名の信頼を！

釜、かつてけん玉の玉だったものをみつける。

釜 これ、なんですか。

蛭 ……

釜 これ……

青木 さあ……

釜、それを手に取り、しばらく迷った末、「物体」につける。

野見父 え？

釜 いや……なんとなく、こうかなって……

野見父 ああ……

釜 どうです？

野見父 うん……完成、したのかもしれない。

釜 完成？

野見父 もう完成してると思ってたけど、今ので、完成したのかもしれないという感じがする。

釜 青木先生、どうですか。

青木 うーん……その……分かる、って感じ。

釜 わかる？

青木 うん、なんかその、秀葉先生ほいというか。

釜 はあはあ。……蛭さんどうですか。

蛭 ええ？

釜 これ。

蛭（へらへらしだす）ああ……確かに、秀葉先生ほい。

釜 ああ。

蛭 まるで秀葉先生が、そこにいるみたい。

釜 そんなに？

蛭 うん。

ロッカールームから、カンカン！ という音が聞こえる。

青木、びっくりとする。

釜、興味を持ってロッカールームをのぞき込もうとする。

青木（突如歌いだす）おそば おそば おそばには 不思議な力があるんだよ

青木、歌いながら、やんわりと釜を制する。

釜 今月の歌だ……

蛭 (ほぼ同時に) 今月の歌だね……
青木 ……秀葉先生、ロッカーされちゃったと、思う。
釜 今の音なんですか。
青木 分からない。分からないけど、先生はとっても怖い。
蛭 誰かがロッカーを手で叩いてますよね、
青木 誰かがロッカーを手で叩いていると、私も思う。

問。

釜 あ、ロッカーされちゃったなら、ゲネやんなきゃなんで、行ってきます。
青木 え？
釜 失礼しましたー。

釜、去る。

青木 え……。そんな、あれ……。?
蛭 確かめてないんですか。
青木 え？
蛭 誰が叩いてるのか。
青木 ……確かめてないよ。
蛭 どうしてですか。
青木 ……怖いからだよ。
蛭 秀葉先生かもしれないのに？
青木 ……秀葉先生じゃない。
蛭 なんで分かるんですか？
青木 ……水柿先生がロッカーされてから、ずっと鳴ってるのよ、これ。

問。

野見父 じゃあ、その水柿先生が？
青木 分かりません。
蛭 確かめたほうがいいんじゃないですか。
青木 どうやって。
蛭 いや、ロッカー開けて。
青木 ええー？
蛭 ……ええー？
青木 だって第一、どのロッカーから鳴ってるか、分からないし、
蛭 え、水柿先生のロッカーじゃないんですか？
青木 いや、私もそうだと思うけど、でも、人がいるときに鳴ったことがないから。
蛭 それも確かめてないんですね
青木 だって怖いじゃない

蛭 助けを求めているかもしれないじゃないですか
青木 食べられちゃうかもしれないじゃない！

間。

蛭 食べられちゃう……？

間。

蛭 ロッカーに……？

間。

蛭 食べ、られてるんですか？ ロッカーに。

青木 え、違うの？

蛭 なんか、別の世界につながってるんだと思ってました。

青木 別の世界。

蛭 はい。

青木 それは……ネザーゲートのな。

蛭 ネザーゲート。

青木 うん。

蛭 ネザーゲートってなんですか。

青木 え……あの……え、知らない？

蛭 はい。

野見父 あ、私も知らないです。

青木 ええ？ ……あ、じゃあ、いい。

蛭 え？

青木 いや、その……忘れて。

蛭 はあ。

野見父 声とかは聞こえないんですか。

青木 え？

野見父 カンカン鳴ってるときに、声とかは、

青木 聞いたことないです。

野見父 もし助けを求めているなら、声とかもね、聞こえていいと思うんだけど、

青木 ああ……

蛭 声が出せないのかも。

青木 ええ……

蛭 ああでも、何かを伝えようとするのか。

青木 え？

蛭 あ、だからですね、助けてほしいと思って叩いてるんだとしたら、声も一緒に出すだろうし、声を出せないような環境だったとしたら、叩いてる音で、その音からなにかメッセージが伝わるような、そ

の、作為的な、あれが、あると思うんですよ。

青木 えーっと、つまり……

野見父 うんだからさ、別の世界があるとして……いい世界ってこともあるよね。

蛭 いい世界？

野見父 うん。なんかすごい楽しい。だから戻ってこないのかもしれない。

蛭 じゃあそもそもあのカンカンという音はなんなのかっていう、ことですよね。

野見父 うん。でもまあそれは……

蛭 なにかがぶつかってるわけですよ。

野見父 善意かな。

蛭 え？

野見父 善意が、こう、飛んで……ぶつかってるのかもしれない。

蛭 善意？

野見父 その、別の世界ではさ、飛んでるんだよ。善意が。ハートの形で。だっていい世界だから。
蛭 ……何を言ってるんですか？

野見が職員室にやってくる。

野見 秀葉先生がロッカーされたの認めたって聞いたんですけど。

蛭 のみこ。

野見 (青木に) ほんとですか。

青木 あの……

野見 ロッカーされたんですか？

青木 ……多分。

野見 ロッカールーム行かせてください。

青木 どうして。

野見 助けるんです。秀葉先生。

青木 いやいやいやいや

野見 線越えていいですよね。

青木 線も越えちゃだめだしロッカールームも行っちゃダメ

野見 どうしてですか！

青木 なにが起きるか分からないから

野見 でも……でも、誰かが行かないと、

ロッカールームから、カンカンという音が聞こえる。

野見 ほら！

青木 あなたを行かせるわけにはいかない。

野見 どうして！

青木 大人が二人も消えてるの。どういうあれだか全然わかんないけど。

カンカンという音、断続的に聞こえ続ける。

野見 じゃあ青木先生行ってくださいよ
青木 いや！

野見 い、いやあ！？

青木 いや！

野見父 私が行きますよ。……娘を行かせるわけにはいかないですから。……なんかずっと鳴ってるし、チャンスじゃないですか。

青木 いいんですか。

野見父 いいものにも。……いつか誰かが、やらなきゃと思ってたから、置いてるんですよ？ 水柿先生の、

鎖でぐるぐるのロッカー。

青木 ……まあ……

野見父 部外者じゃないですから。

野見父、ロッカールームに入る。

音、聞こえ続けている。

みな、無言でいる。

ほどなくして野見父が戻ってくる。

青木 どうでした……？

野見父 秀葉先生のロッカーって、どれですかね。

青木 え？

野見父 名前が書いてあるかと思ったら、なくて。

青木 あ。……えーと、ヒューマンパワーアカデミーって書いてあるステッカーが貼ってるロッカー、あるじゃないですか。あるんですけど、その、右です。

野見父 分かりました。

野見父、ロッカールームに入る。

音、聞こえ続けている。

蛭 ヒューマンパワーアカデミー……

野見 宗教でしょ。

蛭 え、そうなの。

野見 うん。

青木 ……

蛭 え、誰先生のロッカーですか。

青木 ひみつ。

蛭 ええ？

青木 私じゃないよ。

蛭 工藤先生ですか？

青木 ……言いません。

野見父、戻ってくる。

野見父 秀葉先生のロッカー、カギ、閉まっていますね……

青木 ああ……

野見父 なんか、マスターキー的なものとかって……

青木 探してみます。

蛭 骨、なかったですか？

野見父 骨？

蛭 はい、骨。なんかロッカーの周りとかに。

野見父 ……秀葉先生の？

野見父 そんなわけではないでしょバカじゃないの。

野見父 ええ？

蛭 見たら分かると思います。

野見父 ああ……

野見父、ロッカールームに入る。

一同、無言。

野見父、出てくる。

野見父 これ？ (骨を持っている)

蛭 あ。

野見父 ロッカーの上に置いてあったけど。

蛭 あー……、いや、それじゃないですね。

野見父 ええ？

蛭 もうちょっとリアルなやつです。

野見父 これしかなかったよ。

蛭 ええー？

野見父 え、これじゃないの？

蛭 はい。

野見父 ああ……

野見父、ロッカールームに入る。

蛭 入っちゃだめですか。

青木 だめ。

蛭 これ、時間かかりそうじゃない？

野見父、出てくる。

野見父 いや、ないよ。これしか。

蛭 あ、じゃあ、それ、もらっときます。

野見父　なんかごめんね。
蛭　いえ。
青木　音はどこから鳴ってました？
野見父　……ああ！

野見父、ロッカールームに入る。

青木　ええ……？
蛭　ほらあ……

しばらく無言。
ロッカールームの音がなくなる。

野見　音、しなくなったね。
蛭　うん。

間。

青木　（ロッカーに向かって）野見さん？

返事がない。

青木　（ロッカールームをのぞいて）あれ？
蛭　え？
青木　いやなんか、暗くて。
蛭　いないんですか？
青木　いや……

工藤が入ってくる。なにかしら、しながら。

青木　工藤先生どこ行ってたんですか！
工藤　え？　いや……

工藤、机から荷物を取り、帰宅する。

工藤　お疲れ様です。
青木　え、いや工藤先生……

青木、工藤を追いかける。
間。

蛭 え、どうする？
野見 え、どうするって？
蛭 （ロツカールームに）行く？
野見 ……あ、私戸田先生待たせてるわ。
蛭 え、なんで、
野見 二人でやることにしたから。
蛭 え？
野見 きれいな演劇。戸田先生と。
蛭 えー
野見 うん。
蛭 え、じゃあ秀葉先生は？
野見 うーん、

釜が入ってくる。

釜 失礼します。
野見 あれ、ゲネは？
釜 え、出番終わったから。
野見 あんたね、最後までいなさいよ。
釜 いやもう、十分でしょ。
野見 まじで演劇分かってない。
釜 帰るけど、帰る？
野見 いや、私今からゲネあるから。
釜 え、ゲネ？
野見 うん。
釜 へえ
野見 見る？
釜 あーうん。

蛭、物体に追加された、けん玉の玉だったものを、手に取る。

釜と野見、それに気づく。

蛭、いきなりそれをロツカールームに向かって投げる。

やや間があって、それが投げかえってくる。

終わっていく。

終わる。